



願阿上人御命日梵鐘十三声。大西皓久執事長、森清頭執事、大西晶允執事が出仕し、般若心経等を風誦した（5月13日）

清水 第二三四号 目次

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・青龍会（2025年3月15日）

再録 冠頭語

「おおきに」忘れがたき人たち……………清水寺貫主 森 清範……………2

大西良慶和上法話「般若心経講話」⑥……………大西良慶……………4

清水寺 長臈語り⑤「おみくじ」……………清水寺長臈 森 孝忍……………13

「四十手深要決義」を読む 第31回……………清水寺執事 森 清頭……………28

清水寺・古写真館」平井仁兵衛寄付の真新しい石柵……………坂井輝久……………51

地主神社、重文本殿・拝殿を保存修理 清水寺学芸顧問……………高橋大樹……………65

『成就院日記』翻刻・刊行にあたって③……………清水寺史編纂委員……………82

『成就院日記』第九巻』刊行…………………………84

清水寺の登場する本…………………………86

隋求堂参拝5万6千人余…………………………87

今年も雨の「みずの日」法要…………………………88

能登復興へ「共」「生」揮毫…………………………89

「学峯」舞台で謡、御本尊に誓願…………………………91

大黒天慶讃法要、新緑の季節に…………………………92

令和版「参詣曼荼羅」、4年生が制作…………………………94

WCRP国際委のトップ来山…………………………96

空手家・清水希容さん、舞台で奉納演武…………………………98

明治の測量点、JICA研修員が見学…………………………99

五郎丸さん、スポーツと仏教考える…………………………101

イタリア大統領、眺望楽しむ…………………………103

北陸新幹線延伸、京都仏教会が署名開始…………………………104

仏旗と国旗、4月から掲出…………………………106

内 外 往 来…………………………108

編集後記

冠 頭 語

人々よ、観音に帰りたまえ。

弱き者、乏しき者、迷う者、

悲しき者、苦しむ者来って

観音の温き御胸に抱かれよ。

観音は人々の帰るを

待ちたもう

一休禪師の詞に「釈迦は人を仏にし、利久は人を茶にす。」と云うたと聞く。

観音は人を観音にし この社会を普陀落の淨土とする。

現在の日本人は文化の光彩に陶然として楽しむであろうが、内観すると、歌を忘れた「カナリヤ」で、アジアを忘れて同人種の悲惨なる戦争を静観し、阻止に挺身しない。

利益のために戦争の雇員となり、軍需工場となり、やがて、いきおい戦争の渦中に捲き込まれる、悪循環を考えないのは業障である。

早く悪夢より醒めて観音の慈悲と正智に帰らねばならぬ。

良 慶

『清水』創刊号「冠頭語」再録―北法相宗60年

右ページ「冠頭語」は、『清水』創刊号の巻頭に掲載されています。

人々よ、観音に帰りたまえ。



大西良慶和上筆「念彼観音力」碑。ねんびかのりし「法華経観世音菩薩普門品（観音経）」に「念彼観音力〓観音力を念じなさい」とある。和上の雄渾な名筆で、一九六四年の本堂大修理から北法相宗の立宗、御開帳などが年を追って記されている。碑は一九六七年五月、「洗心会」が建立した。同会は京都市民による仏教修養団体で、毎月二回の和上による出向法話を開いていた

鮮烈な印象を残すこの一文は、清水寺の中興開山・大西良慶和上によるものです。布教誌『清水』は、北法相宗の立宗に合わせ、一九六五年（昭和四〇）六月に現在と同じ判型で創刊されました。

創刊号での良慶和上は、当時の世相にふたつの警鐘を鳴らしておられます。ひとつは激化するベトナム戦争に、もうひとつは宗教教団のあり方に対してです。前者の戦争終結まで、それから十年かかりました。後者では、寺院を訪れる人たちが「宏大な殿堂も宗教的に見ず、文化財と称し、祖先の遺物として観光的な観察をするにすぎない」が、これを否定するのではなく、教団は「人心のうつりかわりにしたがって変化しなければならない」と、時代に合った柔軟な対応の必要性を説かれました。

六〇年前の和上の言葉は、ウクライナやガザで戦乱が続く、円安による海外からの来山者であふれる二〇二五年（令和七）の現在をなぞっているようにも感じられます。『清水』は、おかげさまで二三四号を迎えることができました。あらためて和上の言葉に立ち返り、編集を続けてまいります。

「おおきに」忘れがたき人たち

清水寺貫主

春

清
苑

梅は、春に美しく咲く花です。

原産地は中国で、およそ二千年前に編まれたとされる薬物学の書『神農本草經』には滋養強壯剤としての梅の実の薬効が紹介されており、日本には早くから伝わりました。その後、遣隋使や遣唐使が持ち帰った梅の実は火であぶり、薬として用いたようですね。一方、植樹されて育ち、花を咲かせるようになった梅もあります。中国にならない、日本でも梅は鑑賞の対象として好まれました。また、日本最初の漢詩集『懷風藻』をはじめ、『万葉集』などでは、梅が歌の素材として取り入れられていったようです。梅にまつわる話をいくつか紹介しましょう。

『万葉集』などに取り上げられている歌人・大伴旅人（六六五〜七三二）に、このような歌があります。雪の色を 奪ひて咲ける 梅の花 今盛りなり

見む人もがも

『万葉集』は四五一六首を採り、このうち植物を詠じた歌は一七〇〇首です。内訳は、萩が一四二首、梅は一一九首、桜も四七首です。二一世紀の今は、桜の方が好まれるかもしれませんが、梅は香りも枝ぶりも芸術的です。私は、梅のファンのひとりです。

長浜盆梅展とのご縁深く

毎年一〜三月には、滋賀県長浜市の慶雲館で鉢植えの梅を紹介する「長浜盆梅展」が開かれていますね。寒波が厳しかった今冬は開花が遅れ、展示期間を一週間ほど延期したようです。七十四回を迎えた展示会で、慶雲館は京都に行幸された明治天皇をお迎えするために建造され、それはそれは立派な建築です。

私は四十回ほど会場で見せていただき、これまで三つに名前を付けました。梅花がめでたい光の下に咲くとの意味から「瑞光」（八重紅梅、樹齡二〇〇年、高さ二〇〇センチ）、きらめく光の訪れを表す「煌春（こう二重白梅、樹齡一五〇年、高さ一九五センチ）」、清水寺の山号、



滋賀県・長浜観光協会から毎年、清水寺に奉納される盆梅「白雲」。
新年の法要・修正会の結願の頃、満開を迎える

音羽山から「清音（二重白梅、樹齡二二〇年、高さ一六〇センチ）」です。

主催者の長浜観光協会は毎年暮れ、樹齡二〇〇年ほどの盆梅を清水寺に奉納していただきます。慶雲館の小川喜弘館長が自ら軽トラックで運んでこられた盆梅は大講堂の玄関に飾り、修正会の結願で来山された方々をはじめとする新年のお客様に、満開の美しい姿をご覧いただいています。白梅ですので、「白雲」と名付けました。

北陸に近い長浜で日頃から大切にお世話されてきた梅の花は、京都の清水寺の暖かい屋内ではすぐに咲いてしまいます。初詣りや法要など、新年のご来山者さまを満開の梅でお迎えできるよう、届いた鉢を最初は冷たい外気の屋外に置いておき、開花の時期を調整しているのですよ。今冬は「白雲」に梅の実がぼつぼつと生りました。花が咲くと、香りに誘われて寄ってくる虫を狙ってクモが巣を張るのです。長浜の会場でもやはり、梅の木にはクモの巣が張ることでした。

二月九日付の京都新聞のコラム「天眼」には、国

文学者・中西進先生が寄稿をされていましたね。トランプ氏の二度目の米国大統領就任に合わせ、中西先生は令和の始まった二〇一九年の来日での『万葉集』を引いた大統領スピーチをあらためて紹介し、「挨拶的な要素」があるにせよ、「どれほど来訪国の本質にふれているかを探ることが肝要」と、説いておられます。『万葉集』について、大統領はさまざまな解釈をスピーチで披露しましたが、日本人がこのような視点も持ち合わせていたかどうかが問われている、と中西先生は問題提起されていました。

梅花の宴 旅人が催す

スピーチで大統領が取り上げたのは、先に挙げた歌人・大伴旅人が太宰府の自邸で催した「梅花の宴」と思われます。宴の序文は元号「令和」の典拠とされ、『万葉集』第五卷に収められています。大統領は、旅人と山上憶良（六六〇？～七七三年？）の親しい交流を示し、「古代の知恵から受け継がれた美しい教訓として、家族や未来の世代に対する厳粛な責任を思い出させてくれる」とスピーチしました。なお、

「令和」と梅が登場する宴の序文は、以下のように続きます。

時に初春の令月にして

気淑く風和らぎ

梅は鏡前の粉を披き

蘭は珮後の香を薫らす



元号発表の際、菅義偉官房長官が掲げた「令和」を揮毫した茂住青郎（もずみ・せいそん）氏が手掛けた令和碑。大伴旅人の邸宅があったとみられる地域に建つ（福岡県太宰府市）

旅人の邸宅で宴会が開かれたのは初春の正月。よき月、気は清らかで澄み渡り、風も穏やか。梅は鏡台の前で化粧する女性の白粉おしろいのような色に咲き、蘭の花は腰に付けた香のように薫っている、といった意味でしょうか。

この「宴」では梅の歌が三十二首詠まれており、そのひとつが旅人の次の歌です。梅の花が散る様子を、空から降る雪に例えているのですね。

わが園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の流れ来るかも

中西先生は、この歌が「春の可能性と潜在能力」を詠った作品としてトランプ大統領が念頭に置いていたのではないかと推測します。梅が「花」「雪」ふたつのイメージを持つことが根拠だということです。何かと物議を醸す大統領ですが、来日のスピーチで『万葉集』を引用し、日本人の感覚に基づいて話せるセンスの持主でもあるのですね。

万葉歌人だけでなく、清少納言（生没年不詳）も歌ではありませんが、『枕草子』で梅に触れています。曾祖父とされる清原深養父ふかやぶ（生没年不詳）は歌人で、

琴の名手と言われていました。『百人一首』にも採られており、『古今和歌集』には次の歌が採られています。

冬ながら 空より花の 散りくるは 雲のあな
たは 春にやあらむ

寒さ厳しい冬でありながら、空から花びらが散って落ちてくるなら、雲の向こうはもう春になっているではないか。と想像しているのでしょうか。清少納言自身は「木の花は、濃いも薄きも紅梅」と書いた方ですから、紅梅好きやったのでしょうね。

和上の歌に親しむ講座

清水寺では今年、毎月第四日曜朝の「北法相宗仏教文化講座」で京都産業大学教授の小林一彦先生が講師として、和歌と清水寺のお話をされています。

歌人としての大西良慶和上にも着目され、二月の回では「ねがはくは花のしたにて春しなん」と歌った西行（一一八〇―一二〇〇年）と良慶和上を比べて、作品を紹介されました。おふたりは、お釈迦さまが遷化された二月十五日を意識し、和上は二月十五日に、

西行は二月十六日にそれぞれ遷化されています。

良慶和上もまた、梅の歌や絵をたくさん遺されました。私も週一回、墨絵の先生について稽古しました。書は難しいのですが、絵もまた難しい。字は下手でも「木へん」に「毎」と書けば「梅」と読めますが、絵はほんとうに難しいものです。

今年は、清水寺仁王門前にある老紅梅の子孫木を、青森県弘前市の北門鎮護岩木山神社に奉納植樹してから七年になります。岩木山神社の社伝によると、八〇〇年（延暦一九）に清水寺の大本願・坂上田村麻呂公がこの地に至り、神社祭神の靈験でこの地を平定したとして山頂奥宮を再建し、下居宮を建立して父君命を合祀した、とされています。津軽地方には田村麻呂公の伝承が数多く、二〇一三年からは津軽音羽会を通じ、地元と清水寺とのご縁を深めてもらいました。

津軽で元氣 京の老紅梅

いざ岩木山神社に植樹となりましたが、「果たして京都の老紅梅が、北国の津軽で無事に育つのだら

うか」と心配になりました。清水寺の老紅梅は、明治初期の廃仏毀釈で荒れた境内に、復興を願う寺関係者によって植えられました。明治時代の境内の写真にも写っており、植樹用に分けた時には、すでに推定樹齡が一五〇年に達していました。津軽には木を二本持っていく、一本は予備として地元の植木屋さんに世話を頼みました。神社でも植木屋さんでも、それぞれ高さ二メートルほどに立派に育ちました。

二〇二三年の五月上旬、青森県で招かれて揮毫する機会がありました。梅が気になって見に行きましたら、ちょうど美しく咲いていたのですよ。青森県での梅の開花時期は、例年であれば四月上旬です。一カ月は遅い開花ですね。「京都から会いに来るのを、花が待っていて咲いたのでしょう」と地元の方から言われ、梅の木に「すんまへんな、おおきに」と声を掛けてきました。

植樹の奉納法要は、二〇一八年四月二十五日に厳修し、梅の木を田村麻呂公の伝記から「丹款梅」と名付けました。その人となりを評して、「怒りて眼を廻らせば猛獣も忽ち斃れ、咲いて眉を舒めれば



清水寺・仁王門前の老紅梅。子孫木が、青森県弘前市の岩木山神社に奉納植樹され、「丹款梅（たんかんばい）」と名付けられた

「稚子も早に懐く」とあり、「丹款、面おもてに顯あらわる」と。
「田村麻呂公の怒りのまなざしは猛獸でも倒すほど

が、一方でやさしい表情を見せるとすぐに幼児がなつく」「真心が顔に出ている」というのですね。

『大鏡』に収められた逸話「鶯宿梅おうしゆくばい」にも、梅が登場します。御所清涼殿の梅が枯れ、名木を探す村上天皇（九二六〜九六七年）に自宅の梅の木を献上せざるをえなくなった紀貫之の娘が「梅の木を手放したくない」との思いを歌ににじませ、

勅なれば いともかしこし 鶯の 宿はと問はば
いかが答へむ

と詠んだのです。「天皇の命ですから、どうぞ梅の木はお持ちください。でも、梅の木に巣を設けていたウグイスから『自分の巣はどうなったのか』と問われたら、どうしましょうか」との内容です。貫之の娘が住んだ地にあった林光院（京都市上京区）は、現在は移転して相国寺の塔頭として残っています。寺は元の地になくとも、子孫木は今も林光院に健在です。

では、平安時代までさかのぼると、私たちの先祖は何人ぐらいになるのでしょうか。平安時代を千年前とし、一世代を三十年として計算すると、両親が

ふたりですから $2 \times 2 \times \dots$ となって2の30乗、およそ八十五億人となるようです。二十一世紀の私たちは、平安貴族をはじめ、当時のほとんどのお方とながって生かされているのですね。このうち、ひとりでも欠けていたら、今の私はいなかったことになります。

神道では、過去から未来へと流れる時間を「中今」と言い、時間の一部を指すようです。つまり、自分ひとりで生きているわけではなく、先祖から引き継いできた命、生かされている命、を意味するのですね。

これに対し、仏教では私たち心の動きのあるものを四つに分け、死んでから次の生を受けるまでを「中有」▽生を受けた瞬間の「生有」▽受生から死ぬまでの「本有」▽臨終の瞬間「死有」——と言います。このうち、「中有」の期間は七日とも四十九日とも言われ、死後七日ごとに法要を営み、四十九日を満中陰と呼びます。この間、亡くなった方は、閻魔様による七回の裁判で判決を受けるのですね。裁判の心証をよくしようと、この世で行われるのが「追善供養」です。あの世で仏縁を結んでいただけ

るのは、きょうの法要を聞いていただいたような方々ですね。

この年末年始に、私は親しい方を亡くしました。このうちのひとりは、普段はいい加減に見える和尚でした。いい加減やったのに「お世話になりました。おおきに」と言うて逝きました。これは感心しましたね。「おおきに」「すんません」は、しょっちゅう使っていないと、いざという時に使えない言葉なのです。

横山学芸員の「おおきに」

もう十五年ほど前ですが、清水寺初代学芸員の横山正幸先生を亡くしました。横山先生もまた見事でしたね。二〇〇九年に八十八歳でお亡くなりになるまで二十六年間、清水寺で学芸員、学芸顧問として布教誌『清水』に学術的な論考から身近な話題までを出稿・編集される一方、歴史学者の林屋辰三郎先生らと『清水寺史』編集委員として幕末維新の激動の頃から、一九六五年に北法相宗を立宗された良慶和上の足跡までをつぶさに調査・研究されました。何といっても、ご自身が清水観音の篤信でした。御

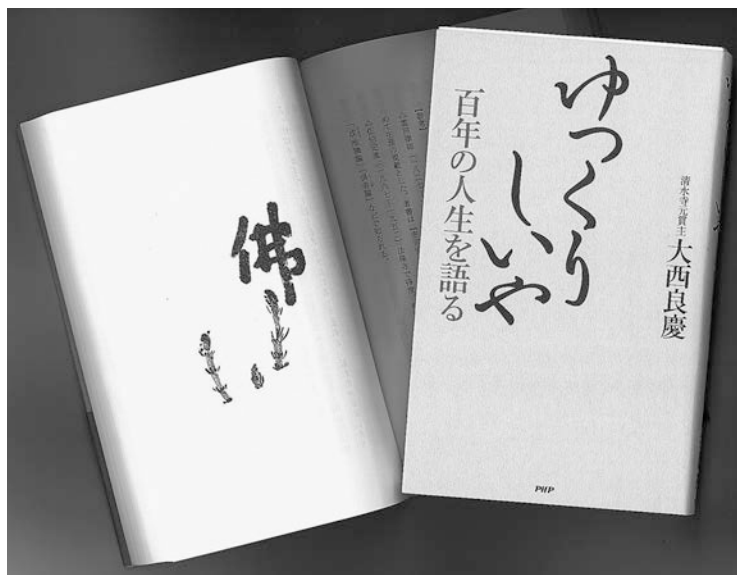


清水寺に関する横山正幸学芸員の著作。自らたくさんの付箋を付け、読み込んだ跡が残る

著書として『成就院日記』をつぶさに読み込んだ成果として『実録「清水の舞台より飛び落ちる」』、当山の歴史や信仰、文化などを網羅した『京都清水寺まんだら』、境内の石碑を悉皆調査した『清水寺の信仰 縁起と石文』を残され、その中では宗旨から歴史までを一般信徒から専門家にまでわかりやすく伝えていきます。

横山先生の病状が進み、入院されてから一カ月後に当時の大西眞興執事長とお見舞いに出向きました。先生は私の親父ぐらいの年齢でした。「もう逝くさかい、一緒に来い」と言われたら断ろうな、と執事長と冗談を言いながら行ったのです。病室に入ると、「わし、もうこの世を卒業しているんや。それでもあの世からお迎えが来ないのはどうなっているんや？ いっお迎えが来るんや？」と、先生から尋ねられました。

そこで思い出したのが、良慶和上の語りがまとめられた『ゆっくりしいや』（PHP研究所、一九七六年）です。出版準備で和上が百一歳の頃、浄土真宗の僧侶・野々村智劔（はなむら ちけん）さんが何度もインタビューに来られ



「良慶さん」と呼ばれ、市民から親しまれた大西良慶和上の語り口を生かし、
今も幅広い層に親しまれている『ゆっくりしいや』（PHP研究所）

ました。私はまだ、お茶くみ小僧の時代です。和上は毎回、話を終えると野々村さんに、「ゆっくりし

いや」と声を掛けられました。これがあのロングセラーの書名になったのです。

さて、横山先生の問いかけに対して私は、「先生、あわてることはありません。ゆっくりしはったらよろしいやないですか。尊敬されていた和上の御著書に『ゆっくりしいや』がありますでしょう」と返答しました。横山先生はにこっと笑顔になり、「おおきに。安心した」とおっしゃって合掌されました。お亡くなりになったのは、その二日後でした。この「おおきに」は耳に残っています。繰り返しになりますが、「おおきに」は普段から使っていないと、いざという時に言葉として出てきません。

「おおきに」は「おおいにありがとう」が転じた表現のようですから、「おお」は「大」を意味します。「摩訶般若波羅蜜多心経」の「摩訶」も「大」のことです。無量のご縁をいただいている私たちのいのちに思いを馳せると、私たちは代々のいのちをいただいてここにいることが理解できると思います。「おおきに」は、梅花のごとく清らかで香ぐわしく、人と人とを結ぶ愛の言葉でしょう。